第 25 回日本生殖内分泌学会学術集会

11

Web 開催 2020.12.12-25

高プロラクチン血症の治療をすれば IVF 成績は改善するか?

佐藤学 1)、村井未来 1)、中岡義晴 1)、森本義晴 2)
1) IVF なんばクリニック、2)HORAC グランフロント大阪クリニック

【背景】
高プロラクチン(PRL)血症の患者は、PRL 正常な患者に比べ胚質が低下する場合が多い。当院では高 PRL 血症患者に投薬で PRL 分泌を抑え体外受精を行っている。今回、治療を行っている患者でも高 PRL 血症治療後患者での体外受精成績に影響があるか調べた。

【方法】
高 PRL 血症投薬治療中の患者と過去に診断され現在正常化している患者を高 P 群とし、当院で 2017 年 1 月から 2018 年 12 月において体外受精を行った 39 歳以下の高 P 群 109 人と PRL 正常患者（正常群）1014 人を対象に刺激周期と低刺激周期採卵の ICSI、IVF に分け、それぞれ成熟率、正常受精率、移植可能胚率を比較した。また同期間に移植を行った 39 歳以下の高 P 群 124 人の患者と正常群 1264 人を刺激周期採卵の胚移植と低刺激周期採卵の胚移植で分け、移植後の hCG 陽性率と化学流産、GS 率、FHB 率を比較した。

【結果】
ICSI 高 P 群で成熟率が低下した（77.8% vs. 74.1%, P<0.05）。高 P 群と正常群で受精率に差はなく、移植可能胚率は低刺激群の高 P 群で低下した（ICSI:82.6% vs. 57.7%, IVF:75.9% vs. 43.2%, P<0.05）。刺激周期で移植可能胚率に差はなかった。移植後の hCG 陽性率は刺激周期胚移植（57.6% vs. 44.0%, P<0.05）、低刺激周期胚移植（41.7% vs. 36.8%, P<0.05）ともに高 P 群で低下した。妊娠後の予後に差はなかった。

【考察】
治療後であっても胚発生や妊娠に影響があり、低刺激周期胚では顕著だった。高 PRL 血症患者で hCG 陽性率は低下したものの、妊娠後の経過に差はないので可能ならば刺激周期で多くの卵子を取り、治療を進めることが望ましい。